

よさの おる 馨さん  
与謝野



歌人の与謝野鉄幹・晶子夫妻の孫で、元経済財政相の与謝野馨さん(74)が政界引退を表明した。「声」を失ったのが原因だった。

初当選の直後、39歳でまさかのがん告知

「病知られてならぬ」と無保険承知で偽名通院

血液、直腸、前立腺、下咽頭がん4つと闘う

2006年に下咽頭がんの手術を受けました。喉から食道へつながるその箇所が狭まってきて、食べ物が通りづらくなっていました。無理に飲み込むと誤って気管に入り、肺炎を起こしました。食べられないと栄養失調で倒れ、病院に担ぎ込まれて点滴です。初夏の頃はこの繰り返しでした。

喉の再建手術をすれば、声帯は切除するしかない状況でした。声を失えば選挙に出るのは厳しくありませんが、食べられないままでは命に関わります。どちらを取るか決断せざるをえませんでした。7月下旬に手術に踏み切り、女房の

報は病院のベッドの上で聞きまし。8月末に野田佳彦首相から首相公邸での昼食会にお招きいただき「与謝野さんが民主党政権に入って成案をまとめていただければ、ここまでたどりつかなかった」と握手を求められました。秋になってスウェーデン製の人工喉頭を埋め込み、不自由さはありますが、声もそれなりに戻りつ

つあります。器員のごまめな手入れが欠かせず、女房に頭が上がらなくなっちゃった。もう政治家はやりたくないし、やれませんが、

です。医学書をめくると「余命2年」の文字がありました。いずれは首相を目指すという青雲の志も雲散してしまった瞬間でした。当時のがんは不治の病扱いです。病名が知られたら政治生命を失うと恐れ、保険が効かないのも承知で抗がん剤治療に通った病院でも偽名で通しました。女房にも秘書にも明かせませんでした。その10年後です。リンパ腫が腸間膜に転移しているのが分かりました。再発なので、一段と強力な抗がん剤治療に本腰を入れまし

がんと並走した政治人生

①

た。副作用で激しい吐き気と脱毛に散々苦しめられました。カツラをかぶって政治家を続けました。92年暮れに投薬から解放され、悪性リンパ腫は完全寛解に至ります。この後に文相、官房副長官、通産相を務めますが、2000年の落選直後に直腸がんが見つかり、手術を受けました。

翌年に前立腺がん。治るがんだと言いつつ聞かせて治療に臨みましたが、国政に復帰し、最初の経財相を務め終えるや否や4つ目の下咽頭がんの告知が待っていたのです。手術の難しさや余命2年7カ月との宣告に「もはやこれまでか」との思いがよぎり、家族に書き置きも残しましたが、今日まで政治活動を続けることができました。

闘病と政治人生を両立させた原動力は何だったのか。最初に「余命2年」と知った時は無論、心が乱れました。残りの人生をどう充実させるかと色々考えましたが、治療して経過を見る日々が続くとそんなうまい方法はないと分かっていたのです。泣いてもわめいても、誰かに打ち明けたってがんが治るわけじゃありません。医師を信じ、どんなに苦しくても治療はやり切ると決めましたが、後は淡々と普通の生活を送ることこそ「充実」なんじゃないかなと思いついたのです。

患者であることに夢中にならないうちでもいいますかね。いつ頃からか、病と闘う私と、政治活動をやる私を無意識のうちに分けて生きてきました。後の方になると、それらを冷やかに客観視する私も現れました。与謝野馨の中には常に3人の自分がいるんです。

がんを理由に政治家の仕事で手を抜いちゃいけない。そう言い聞かせてきたことで心の張りを失わずにすんだのかも知れません。いわゆる民間療法に心が動いたことはないし、信仰もありません。いま、私の体からがん細胞はきれいさっぱり消えているそうです。(聞き手は編集委員・清水真人)